

公害経験の継承をめぐる多視点性と協働
—公害資料館ネットワークは何をめざしているか—

Multiperspectivity and Collaboration in Passing on Pollution (*Kogai*) Experience:
Aims of the Pollution Museum (*Kogai Siryoukan*) Network

○林 美帆*
Miho Hayashi

1. 公害経験の継承をめぐる多視点性と協働

公害資料館ネットワークは2013年に結成された。公害資料館とは、公害地域で、公害の経験を伝えようとしている施設や団体のことを指している。公害資料館は、展示機能・アーカイブズ機能・研修受け入れ（フィールドミュージアム）の3分野のどれかの機能を担っており、必ずしもハードとしての建物の有無は問わない。また、運営主体についても国・地方自治体・学校・NPOなどがあり、公立／民間など運営形態も様々である。

公害資料館ネットワークは、「公害の経験を伝える」ことが共通項であるが、立場も地域も事象も違うために、伝えたい中身に差異があり、伝える方法も異なった多様な人たちが集まっている。公害資料館ネットワークは、これまでほぼ毎年（2020年度からは新型コロナウイルスの影響もあり隔年で）、公害資料館連携フォーラム（以下、連携フォーラム）を開催してきた。公害の経験を伝えることに関心を持つ様々な人たちが集まり、それぞれの意見を述べて、互いに協力できる可能性を論じ合っている。公害の経験をどのように伝えるかを議論する場がつけられたことは、現代において、再度公害から社会を見つめることの意義を明らかにする取り組みといえる。

「持続可能な開発のための教育」（Education for Sustainable Development: ESD）の文脈は、公害反対運動の主張として公害経験を伝える活動からの変化を生んだ。本報告では、公害の経験を伝える取り組みが「多視点性(multiperspectivity)」を獲得し、協働の輪を広げていく過程について論じる。

2. ESD と多視点性

「国連持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」（2005～2014年）が公害学習に与えた影響は大きい。DESDの目的は、「ESDのステークホルダー間のネットワーク、連携、交流、相互作用を促進する」ことである。この「ステークホルダー」を公害のステークホルダーと読み替えることで、公害地域のESDは展開されていく。ESDは、多様な主体の参加とパートナーシップの概念を示しており、フォーラムとしてのミュージアムで重要視され

* 岡山理科大学教育推進機構基盤教育センター Center for Fundamental Education, Institute for the Advancement of Higher Education, Okayama University of Science 〒700-0005 岡山県岡山市北区理大町 1-1 E-mail: m-hayashi@ous.ac.jp

る「多視点性」の可能性を開くことになった。

ただし、ESD の概念が公害学習に影響を与えるには、いくつかの段階が必要であった。DESD の政策の一つであった環境省「国連持続可能な開発のための教育の10年促進事業」のモデル地域に大阪・西淀川地域が採択された（2007～2008年度）。活動名は「持続可能な交通まちづくり市民会議」であり、財団法人公害地域再生センター（以下、あおぞら財団）が事務局であった。しかし、その地域の課題という部分に「公害経験を伝える」ことは組み込まれなかった。

公害経験を伝えることを中心課題にして、ESD を実践したのは「公害地域の今を伝えるスタディツアー」である。あおぞら財団は、2009～2011年度に地球環境基金を活用して公害スタディツアーを富山・新潟・大阪で企画・実施した。公害の「学び」に関する円卓会議と協働を、公害スタディツアーで達成することができたのである。

3. 公害資料館ネットワークは何をめざしているか

主義主張の違う人たちのパートナーシップは困難を極め、絵に描いた餅に終わることが多い。その中で、公害資料館ネットワークが実現したのは、このパートナーシップの中核には「学び」があったからである。共に学んで体験して、経験として積み上がったものを実践し、またその取り組みを学ぶという循環が生まれていく。

「公害を知らない」人が多数になっている現在、公害資料館の存在意義は高まっている。公害を伝えるというとき、それを直接経験した当事者が発するものだけに頼るわけにはいかなくなりつつある。公害資料館は、現代において公害の経験を伝え続ける装置だといえる。「公害から環境へ」と言われる中で、公害が過去の問題として後景に退き「公害を学ぶ意義はどこにあるのか」と問われる現実はいまだにあるが、各地の公害資料館は、公害問題が現在もあることを可視化するとともに、公害経験を学び続ける価値があるものとして発信していこう。現在社会に問いかけつつ、公害経験を学ぶ価値について再考し続けることが求められている。

参考文献

安藤聡彦・林美帆・丹野春香編（2021）『公害スタディーズ：悶え、哀しみ、闘い、語りつぐ』ころから

清水万由子・林美帆・除本理史編（2023）『公害の経験を未来につなぐ：教育・フォーラム・アーカイブズを通じた公害資料館の挑戦』ナカニシヤ出版

除本理史・林美帆編著（2013）『西淀川公害の40年：維持可能な環境都市をめざして』ミネルヴァ書房

除本理史・林美帆編著（2022）『「地域の価値」をつくる：倉敷・水島の公害から環境再生へ』東信堂